

私達と難民のこれから

3年1組20番 戸田恵梨子

《はじめに》

「グローバル化」という言葉が注目されている現代、着ている洋服のタグを見れば東南アジア原産であったり、海外からの郵便は2日で届くというような”もの”のグローバル化が進んできた。さらに周りにいる人々を見てみれば、外国人労働者や留学生など”ひと”のグローバル化も進んでいる。実際に私の兄もインドネシアに留学、就職しており、そんな環境の中で「外国で暮らす」ということに私自身が興味を持つのは必然的だった。

《序論》

「海外で暮らす」と言ってもさまざまな種類がある。他国へ出稼ぎのために来ている人、自国から逃げざるを得ない人などこれら全ての人々を「移民」と言う。「移民」の中にも様々な区分けがあり、代表的なのが「難民」、「外国人労働者」だ。これらについてグローバルゼミで学んでいくなかで特に「難民」と呼ばれる人々に興味を持った。「難民」とは、「天災、戦争など様々な理由で自国にいと迫害を受ける、又は恐れがあるために他国へ逃れた人」のことであると「難民の地位に関する条約」で定められているが、実際には曖昧にされている部分が多い。難民と聞くと、日本人にとって、どこか遠くの国でのことというイメージがあるかも知れないが、実は数こそは少ないが日本にも難民の方々はいる。出入国在留管理庁の「令和3年における難民認定者数等について」の発表によると、2021年度の難民申請者数は2,413人。そのうち74人が難民として認定を受けた。これは過去最多の認定数である一方で、難民不認定とされた人はその倍以上おり、難民として認定されるべき人が認定されないという状況である。ここで他国と日本の難民認定率を比べてみたいと思う。UNHCR Refugee Population Statistics Databaseの調査によると、2019年時の数値は、アメリカが22.73%、ドイツでは16.05%、さらにイギリスでは39.80%であるのに対し、日本は0.29%と非常に低い数値である。各国との認定率の違いには様々な要因があるが、主に日本の認定基準の高さにある。しかし、いくら認定率が低くても日本にも難民はいる。難民認定率が低い日本で果たして満足できる難民支援が達成されているのだろうか。

《本論》

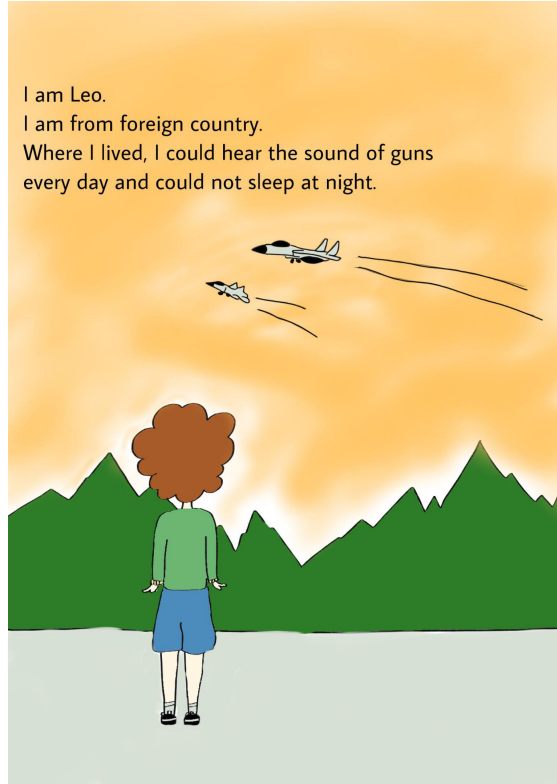
私達は、日本の難民認定率の低さを解決するためにまずは現状を様々な人に知ってもらう必要があると考えた。そのための調査として立命館アジア太平洋大学でインタビュー調査を行った。今までに難民の方に会ったことがあるか、難民に対してどのようなイメージを持っているか、彼らが直面している問題は何だと思えるか、などの内容を1名の大学職員の方に聞かせていただいた。このインタビューの中で、実際に立命館アジア太平洋大学に在籍していた無国籍の学生の話も聞かせていただいた。その学生は両親が難民であり、彼自身は両親が難民申請をしている途中で生まれたため、国籍を得ることが出来なかった。通常、無国籍の場合どの国にも合法的に入国・在留出来ない。さらにパスポートが入手できず、身分を証明出来るものが無いため医療や教育、その他にも将来にわたって生活上困難な場面に遭ってしまう。しかしその学生は、無国籍

でありながら自力で勉強をし続け、その結果、他国の政府から援助を受け立命館アジア太平洋大学に入学することが出来た。

難民の方々自身だけでなく、その子供にまで影響が及ぶことを知り、その子供を手助けしたいと強く思った。その方法として参考にしたのがドイツの難民支援政策である。ドイツは1990年代に旧ユーゴスラビアからの難民を受け入れたことから、難民受け入れに非常に積極的であり、難民支援に関する政策も数多く行なっている。ドイツの移民・難民庁によると、ビザの申請や住居探し、仕事探しや学校教育、言語プログラムなどがある。私達はその中の一つである絵本に着目した。この政策は、教育を満足に受けることができない難民の子供たちの支援のために行われている政策で、言語などの勉強を絵本を通してわかりやすく学ぶことができるようになっている。私達も絵本を作成し、その絵本を公共施設や難民支援団体へ寄付することで日本に来た難民の子供達を支援できればと考えた。学問についての内容にすると対象年齢が限られてしまうため、言葉も通じない他国に来て、寂しい思いをしている子供達に、私達の絵本を読んで少しでも温かい気持ちになってもらえるようにと内容を考えた。幅広い国の子ども達に楽しんでもらうために日本語と英語で絵本を作成することを目標とし、その前段階として神戸女学院で3月に開催された高校生向けの翻訳講座に参加した。そこで、翻訳と通訳の違いを学んだ。通訳は話者の口語をそのまま別の言語に直す。それに対して翻訳は、ただ言葉を別の言語に直すだけではなく、その言葉を発した人の意思、感情をのせてわかりやすい言葉に変える。言葉の持つ力は壮大であり、ひとつの言い回しで誰かを傷つけてしまったり、逆に励ますことも出来ると切に感じた。作成した絵本を英語に翻訳するにあたって大切なことをこの講座を通して学ぶことができた。

私達が作成している絵本は、外国から来た難民の男の子"レオ"が日本に来て様々な文化や体験を通して人と関わることの温かみを知る物語である。レオのように、「この世界は広くていろんな人がいる。あなたのことを大事に思っている人は必ずどこかにいるよ」とこの本を読んだ子ども達に伝えることが出来るよう意識している。

このように探究活動を続けていく中で、第一の目標としている"現状を様々な人に伝える"ことをする機会をいただいた。国際高校内で開催された探究活動成果発表会で「グローバルが生み出すカゼミ」の代表として私達の取り組みを発表させていただいた。国際高校内という小さなコミュニティの中ではあるが、難民問題の現状と私達の目標、目指す未来を沢山の人に伝えることができてより一層成し遂げたいという意識が強くなった。発表後に頂いた感想の中にも、絵本という身近なものを作り、支援することに対して賞賛する旨のお言葉を沢山頂いた。



《結論》

これからのKAKACOファミリーの課題として大きく3つある。

まず第一に絵本を完成させなければいけない。現在日本語で制作出来ているのが全ページの3分1程度である。早急に日本語版を完成させ、さらに英語へ翻訳していかなければならない。そして第二の課題として、どこに私達の絵本を寄付するのか、どのように難民の方に届けて行くのか考えなければならない。現在寄付先として確定しているのは国際高校の図書館のみである。それだけでは、日本に来た難民の子ども達を支援することは出来ないと思う。これからさらに寄付先を増やし、より多くの難民の子ども達に届けていかなければならない。最後に最も重要なのが、私たちがこれらの現状、私たちが考えた改善策を人々に広めて行くことであると思う。高校生活での探究活動だけで満足せず、より良い未来のため行動し続けることが大切だと思う。

難民認定率が各国に比べて圧倒的に低い日本。そんな現状でも確かに難民の方々はいる。今いる難民の方々、これから日本に来る難民の方々がより良い暮らしを送っていけるように私達が行動していかなければならない。私達の作成した絵本が大きな力を与える物ではなくても、難民の方々にとって現状を改善する一つの方法になるようにこれからも活動を続けて行く。

《おわりに》

この探究活動を始める前、私は難民はどこか遠くの国で起こっている自分とは関わりもなくどうしようもない問題だと考えていた。しかし実際に難民について調べて行く中で、実は日本にも難民はいて、周りにはいないかもしれないが決して遠い存在ではないと感じた。私自身がこの問題の解決のために大きな影響を与えることは難しいかもしれないが、何か行動をする事で必ず成果は得られると思った。今現在私が行なっていることが本当に現状を変えることにつながるのか自信はないが、この探究を終え、高校を卒業した後も常に自分自身にできることを考えて生きていきたい。

《参考文献》

- ・認定NPO法人難民支援協会 <https://www.refugee.or.jp/refugee/#section02> (最終閲覧日2022年10月21日)
- ・国連難民高等弁務官事務所 <https://www.unhcr.org/what-is-a-refugee.html> (最終閲覧日2022年9月30日)
- ・国連難民高等弁務官事務所 <https://www.unhcr.org/ending-statelessness.html> (最終閲覧日2022年10月14日)
- ・ドイツ移民・難民庁 https://www.bamf.de/SiteGlobals/Frontend/Images/logo.svg?__blob=normal&v=5 (最終閲覧日2022年7日)